

COVID-19による大学生の都市活動・生活様式の変化

Changes in Urban Activity and Lifestyle of University Students due to the COVID-19 Pandemic

鈴木直輝*・高松未来*・貫井玲音**・藤松駿*・洪義定*・宮園侑門***・樋野公宏****

Naoki Suzuki*・Mirai Takamatsu*・Rein Nukui**・Shun Fujimatsu*・Euijung Hong*・Yuto Miyazono***・Kimihiro Hino****

The spread of COVID-19 has affected the daily lives of university students. We conducted an online questionnaire survey to investigate changes in their urban activity and lifestyle, which was answered by 108 students. Similarities and differences between students living with family members and those living alone were found and discussed.

Keywords: Transportation, Walking, Urban Facility, Neighborhood, Online
 交通、歩行、都市施設、近隣、オンライン

1. 調査の目的と概要

COVID-19の感染拡大による、緊急事態宣言や外出自粛要請、またそれに伴う大学講義のオンライン化などから、都市活動に変化が生じている。居住地の近隣の都市空間が重要になることが考えられ、ポストCOVID-19の都市活動にも影響を及ぼし得る。こうした背景下での、大学生・大学院生の行動・生活様式の変化を把握するため下記の調査を行った。

調査概要及び回答者属性を表1に示す。Google Formでアンケートに回答してもらい、集計を行った。調査期間は2020年5月15日～24日である。調査対象者は、4月から全ての授業がオンラインで実施されている東京大学及び同大学院に所属する学生とし、108名の回答を得た。

2. 交通手段の利用と目的について

各交通手段の利用割合について、自宅生・下宿生別に平常時（大学に通学していた時期、以下同じ。）と外出自粛期間中を比較すると、電車の利用は激減し、ほぼ全てで利用割合が減少している一方で、自宅生の自動車の利用割合のみ増加している（図1）。

歩行時間分布を見ると、自宅生は外出自粛期間中、平常時に比べ、長時間歩行する割合が激減し、徒歩で外出しない人が増えていることが分かる（図2）。それに対して、下宿生は比較的歩行時間の減少が緩やかである。

歩行の主たる目的について、自宅生は「気分転換・運動」という回答が多い（図3）。自分で買い物をする必要がないことで外出機会が減り運動不足になりやすい可能性や、自宅で家族と過ごす時間が長くなり一人になる時間を求めている可能性等を考えられる。

3. 施設の利用頻度について

平常時と外出自粛期間中の各種施設利用頻度を比較した（図4）。ただし、自宅生・下宿生により外出自粛期間中の利用頻度に有意差（t検定, p<0.05）がある3施設は両者を区分した。学校、カフェ・喫茶店、スポーツ施設等の閉鎖あるいは営業自粛対象の

施設は利用頻度が大幅に減少している。下宿生の小売店、飲食店利用頻度は自宅生ほど減っておらず、生活上の必要性から利用したと考えられる。一方、自宅生は公園の利用頻度が増加しており、一人になれる場所として機能した可能性がある。

表1. 調査概要及び回答者属性

調査実施期間	2020年5月15日～24日
調査対象者	東京大学工学部、同大学院工学系研究科または情報学環・学際情報学府に所属する学生108名
学年	学部2年13年13,4年27, 修士1年38,2年23, 博士6
住まい	平常時：自宅生61, 下宿生47 回答時：自宅生74, 下宿生34
住所（回答時）	東京都69, 神奈川県14, 千葉県7, 茨城県3, 兵庫県3, 京都府2, 大阪府2, 他4
主な調査項目	平常時・外出自粛期間中の交通手段別利用時間と目的、施設利用頻度（平日・休日）；外出自粛期間中の新たな訪問場所、新たな行動・生活様式；オンラインショッピング利用

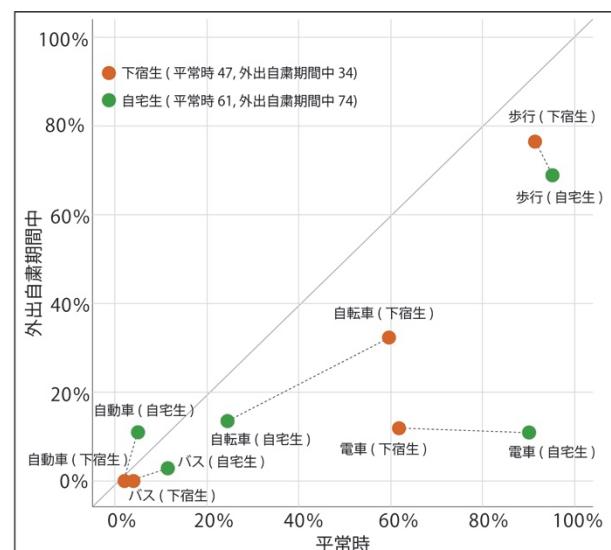


図1. 交通手段別の利用割合の変化

* 非会員 東京大学大学院工学系研究科 (The University of Tokyo)

** 非会員 東京大学大学院情報学環・学際情報学府 (The University of Tokyo)

*** 非会員 東京大学工学部都市工学科 (The University of Tokyo)

**** 正会員 東京大学大学院工学系研究科 (The University of Tokyo)

4. 新たな都市活動について

外出自粛期間に初めて、あるいは久しぶりに訪れた場所（自由記述・複数回答可）を挙げた割合は自宅生の方が多かった。自宅生は「公園・自然」に関する回答が66%と突出しているのに対し、下宿生は「公園・自然」に次いで、テイクアウト等の「飲食店」や「神社」を挙げている人も多かった（図5）。

また、こうした場所を挙げた53人中約8割は外出自粛期間後にも行きたいと回答しており、近隣の都市空間に意識が向いた可能性がある。外出自粛期間後に行かないと回答した約2割は公園等の都市のヴォイドを挙げており、密集を避けなければならない状況下におけるこうした場所の必要性を示唆している。

外出自粛期間に新たに生まれたオンラインにより代替される都市活動の継続意思について、オンライン講義は「積極的に継続したい」という回答が多い一方で、オンライン飲み会は「あまり継続したくない」という回答が多い（図6）。回答理由（自由記述）として、移動に関しては、「移動時間が減ることで、参加機会が増えたり、時間効率がよくなったりする」という肯定的な意見が多数挙げられた一方で、「運動不足になる」「切り替えが難しくなる」という否定的な意見も見られた。空間に関しては、「環境・設備の良い自宅でリラックスしてできる」「相手に見せる部分をコントロールしやすい」「気楽」という肯定的な意見が多く挙げられたが、「表現方法が限られているため伝わりづらく、情報伝達や楽しさに影響する」という否定的な意見も多く挙げられた。

外出自粛期間になって新しく始めたことを挙げた割合は自宅生、下宿生とも約6割だった。自宅生と下宿生に共通している項目に「運動」が挙げられるが、自宅生はオンライン英会話等「オンライン学習」、下宿生は「コミュニケーションツール利用」がそれが多い（図7）。比較的通学時間の長い自宅生は可処分時間が増加したこと、一方で下宿生は日常の会話の機会が損なわれたことが背景にあると考えられる。また、変化した習慣について（自由記述）は、これらに加えて、睡眠時間に関する回答が多く、「移動時間の減少した分睡眠時間が増えた」というものと「睡眠時間が短くなった」というものが見られた。

謝辞

本調査は東京大学・プリンストン大学の戦略的提携に基づく共同研究プロジェクト "Policing, Public Space, and Democracy", およびJSPS科研費 18H01602, 19KK0374の一環として実施しました。

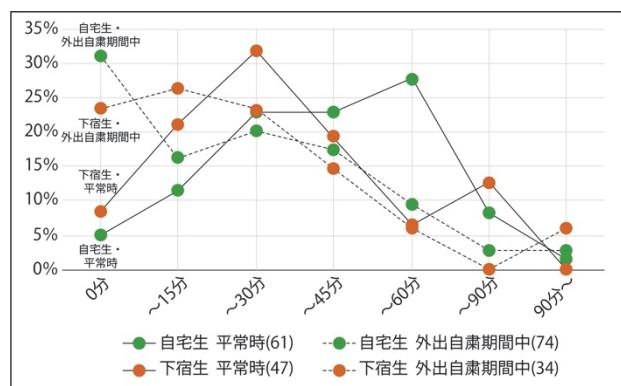


図2. 歩行時間分布の変化

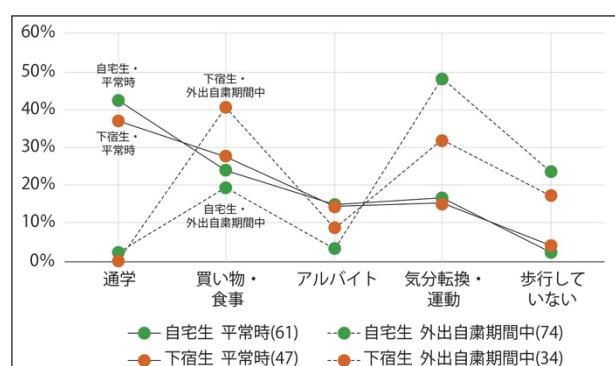


図3. 歩行の主たる目的の変化

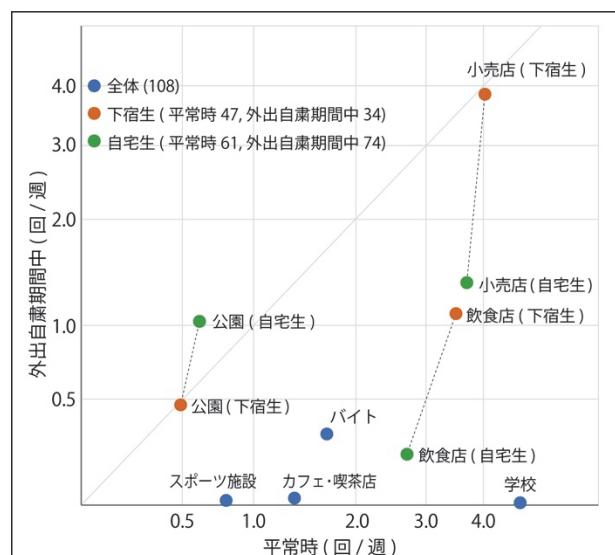


図4. 施設別の利用頻度の変化

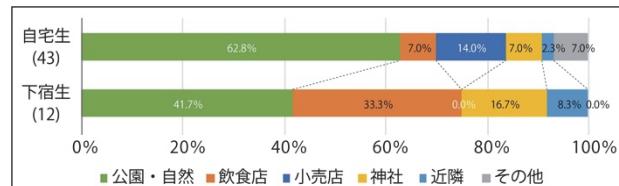


図5. 外出自粛期間中に初めて・久しぶりに訪れた場所の類型

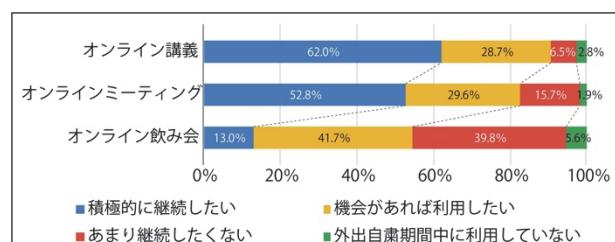


図6. オンラインにより代替される都市活動の継続意向

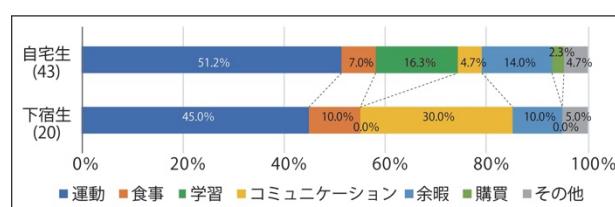


図7. 外出自粛期間に新しく始めたこと